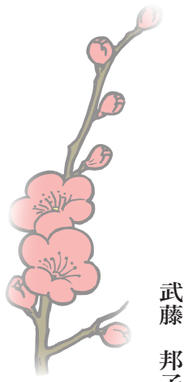
里短歌会　1月歌会

久に見るルノワールの絵のやわき肌上野の森の夕　園田トミ子
映えの顕つ
鵜(ひたき)来る冬陽の庭にアザレアの返り花咲きピンク　山城　雅子
明るし
葉を落とし新年迎ふる樹の根方万年青の朱実際立　松本　幾代
ちて来ぬ
山猟より帰れる夫の提げくるは真紅に熟れし烏瓜　林　淑子
の蔓
年明けて「ママ」と呼ぶ声はっきりと曾孫の声は　岡本　トシ
命の満つる
新年に訪ねし里のノッペ汁匂ひ漂ひ亡き母偲ぶ　川口　敦子
赤間宮の傍えに並びし七盛の塚に淡き春の陽の差す　松岡　節子
茶筅振りもてなす点前の美しき初釜の日の若きあなたは　上田　安代
春菊の苗持ち来たる教え子の草取りしつつ苗植ゑ　安見　朱實
呉るる
渓谷の滝壺あらく水しぶき赤き椿の流れに浮かぶ　武藤　邦子



万句の里俳句会　12月句会

冬ざれや訪(と)ふ人もなき文学碑　宮本　雅子
思ひ切り濃く紅をさす冬紅葉　林　まつ子
袖垣にうすき影つれ冬の蝶　冨田　幸子
参道をよそほふてをり冬紅葉　茨木　幸子
寒禽(かんきん)の一声山気(さんき)揺らしをり　松永　久子
師のことば心に刻む納め句座　中路　郁子
我も又従ふばかり枯尾花　高木　陽子
並木今落葉通りとなりにけり　鋤本　トミ
笹鳴の影の飛び交ふ木下(こした)かな　田中ひさ子
日おもてにあれば鮮(はなす)やか冬紅葉　東　鈴子
寺の庭秘かに返り花紫荊(おうけい)　稲田　羚子
父在りし日の賑はひや冬座敷　斉藤　貴恵

肥後狂句桜会　例会入選句集より

霜の朝　行かんとねるる幼稚園　小川　繁美
中退して　嫁にも行かず親代わり　狩野　本六
大地震　生まれ故郷の無うなった　須藤　新生
霜の朝　セルまで起きんポンコツ車　高倉　新米
うぬぼれて　下手な添削しなはんな　太田　雄三
おとぎ話　アンデルセンて何んかいた　田尻　浩風
霜の朝　ハウスの苗が気にかかる　高木　房枝
中退して　卒て書かれん身のつらさ　窪田　明徳
大地震　損保会社も破産する　田中　孝幸
おとぎ話　正義はいつも裏切らん　藤由　藤紫
うぬぼれて　肩書き並べとる名刺　光堀　善教
おとぎ話　夢一杯の玉手箱　中山　昌子

泗水短歌会　12月詠草

染(そ)まりつゝ紅葉の樹々をくゞり抜け人形美術館の人形の瞳(め)に会う　増田久美子
向岸のお寺の銀杏黄の衣(ころも)日々にぬぎゆく残秋の暮れ　平嶋きくえ
晩秋に散りしくもみじそれも好(よ)し行き交う人ら佇み仰ぐ　福原美智子
紅葉なす葦の川原に霧深し白鷺重く間近を飛び発つ　吉安　永子
病も良し反省の時にめぐまれて亡き人想い念仏ぞ湧く　内田つね代
スーパーの大売出しの人ごみに我はひとりの菜籠満たす　大島　きと
久方に夫在りし日の親友が訪(おとな)い来てくれしに面影薄し　宮本　峯子
温暖化畑ごと野菜の処分さるる冬の陽射しのやや鈍(にぶ)りて　髙藤タツノ
飯炊くは二日に一度仏様も二日に一度でも護られる　長尾はるみ

せせらぎ俳句会　闇汁句会

闇汁の大鍋溢るる程の種　内村　泊虹
神楽舞(かぐらま)ふ人も老ひたり里(さと)の宮　坂本まつえ
咲いていたねと言葉かけやる冬椿　村山　数恵
白寿卒寿米寿喜寿居て闇汁会　藤本　邦治
のんびりと一人居も佳し冬至風呂　岐部　和子
日の蔭を好む千両艶(つや)を増し　藤本アツ子
ぐつぐつと煮え立ち闇汁香(かお)り初(そ)む　服部　静子
一句得て老ひ忘れもし枯木道　内村　鈴子
一枚も葉のない枯木寒そうだ　（中一）渡辺大寿
ふきだまりきれいな葉っぱ見つけたよ　（中一）渡辺一史

肥後狂句水笑会　12月例会

効果てき面　子授け地蔵に参ったら　江　彩
どうなるもねろ　談合ばかりありよるが　美　由
珍しさ　子ばおごりきる親のおる　好　茶
何処吹く風　筆一本にこっとらす　三　水
珍しさ　初めて土産持ちこらす　三　代
何処吹く風　めけんのシワも見らんふり　五　女
効果てき面　遺言するて言うた後　水　光
どうなるもねろ　息子夫婦も出て行った　乗　仏
どうなるもねろ　連れ子で嫁に行かしたが　英　坊

七城短歌会　12月詠草

憎しみの如く力を込めて踏む我を怒りて麦よ根を張れ　村上　幾雄
暫らくを庭に佇み仰ぎ見る燃ゆるが如き夕茜雲　松岡ミチエ
手づくりのキーホルダーを生徒等が我に届くる人権の花運動の日　水田紗陽子
何気なく踏みつけ来たる楠の実も前に落つれば跨ぐは何ぞや　高木　精
学友のお灸の跡の目に浮かぶ娘の背中を流せし折りに　池田　禮子
夫と見しことの喜悦が一つ殖ゆ富士山上空いま過ぐるなり　緒方　寛子
小春日に委ね猫伏に干しし大豆打ち寄す時に鈴の音聞こゆ　佐々　重弘
玉葱苗やうやく植え終え腰のばす間あらず雨粒頬に当たりぬ　池田カツ子

旭志文芸俳句会　12月詠草

根もとまで陽ざしとどきし冬木立　芹川のり子
茶畑や霜よせつけず風車舞ふ　出田みとり
時雨るるや愛犬眠る塚二つ　芹川　蓉子
搾乳の待機の牛の息白し　水谷　ミネ
喪が明けて三年振りに賀状書く　東　芳子
菊池の祖眠りし山の紅葉かな　中尾ヨシコ
冷え込みて旅先に買ふ冬帽子　中山　栄子
さざん花の赤よりピンクさえており　郷　ミヤ子